阿寒湖と前田正名とアイヌ文様のつながり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 和恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17743

【特集　きる・つなぐ】

阿寒湖と前田正名とアイヌ文様のつながり

中村 和恵

福澤諭吉は前田正名が嫌いだったらしい。蓑笠つけて地場産業を奨励する全国行脚だなんて、古くさくてかなわん、とでもおもっていたのではないだろうか。前田が二度にわたって辞さざるをえなかった農商務省（当時）に大臣として返り咲く機運が生じた時、影響力絶大だった福澤の論説（「農商務省の大改革」『時事新報』一八九七年三月二八日）がこれをつぶしたというのは、どうやら定説になっている。名前こそ出さないものの文脈からはっきりと前田とわかる人物を指して「彼の珍しくもなき精神家なるものにして、本来無識無学、文明の思想に乏しく普通の感識さえなくして、固より商売実業発達の理勢を知らず、区々たる人為の保護干渉を以て興業殖産の目的を達し得べしなど盲信する輩にし（…）」とその語調は激しい（祖田修『前田正名』吉川弘文館、一九八七、二〇〇頁）。

福澤は前田を切り捨てた。つまり、日本各地の地場産業や工芸文化と、それを支える自然環境を保護育成して国力を増し、欧米列強に対抗しうるまでに成長しようという、いわばローカルな力でグローバルな力に拮抗することを目指す前田の温存型成長戦略を切って、欧米式のシステムと技術と機械を輸入移植してそれまでの伝統産業に置き換える福澤流の刷新型近代化戦略が、明治日本の選択となった。このことの意味はまさにいま、再考に値する。日本の近代化とはなんだったのか、いまそれが

わたしたちの「豊かな国」「幸福な生活」のイメージにどのような影響を及ぼしているのか。西洋化、近代化、さらに「文明」なるものの本質を問い直すことが不可避におもえる二一世紀初頭にあって、わたしはそれを考えずにはいられない。

富岡鉄斎の描いた前田正名の「行脚」（祖田修『前田正名』より）

前田正名について考えるきっかけは、阿寒湖にもらった。アイヌだけでなく世界各地の先住民族と観光産業・工芸および美術産業についていくつか、長年ぽつぽつと考えてきたことがあって、阿寒湖を訪れたのもその延長でのことだった。道東内陸部に位置する阿寒湖と周辺の森林は、現在国立公園となっている。湖畔では入植和人とアイヌの子孫がともに協力して観光産業コミュニティを形成・維持している。この阿寒湖畔の現在の基礎を築いたのが前田正名だった。

前田正名（一八五〇～一九二一）は薩摩藩士の漢方医の家に生まれた。緒方洪庵に師事して蘭学などを学び、のちに兄らと和訳英語辞典の編纂にもたずさわる。フランス留学ののち和訳仏語事典を出版。外国の文物に関心があったことは間違いない。閉鎖的な排外主義者などではなかった。一八七八年のパリ万博事務官長、大蔵省の役人、山梨県知事、農商務省次官などをつとめるが、派閥対立の中で公務を離れ、全国を行脚、地方の地場産業を伸ばして国力を高めるという自説を説いて回るようになる。逝去時に男爵の称号を受領。福澤諭吉に比べ、その知名度は高くない。だが現在わずかながら見直しの動きがある。林業や地方産業、環境保護の視点から彼について新しい論文がいくつか、書かれている。

祖田修による伝記および『カムイミンタラ　北海道の風土・文化誌』一九八九年九月号（三四号、特集・阿寒）、釧路市ホームページ等を参照したところ、前田と阿寒湖の間に深いつながりが生じた経緯は概ね以下のようなものだ。一九〇六年から一九一〇年にかけて前田正名は国有未開地の貸し付け・売り払いにより阿寒湖畔に三六〇〇ヘクタール近い土地を入手した。彼は阿寒の土

地の一部を牧場化し木材を伐採して売り活動資金にしたが、それだけでなく、阿寒湖畔のいわばエコツーリズム地化を視野に入れていた。「ここはスイスに勝るとも劣らない景色だから、切る山ではない、見る山だ」といっていたという（『カムイミンタラ』三四号）。阿寒湖畔の土地や家を彼は「一歩園」と称し、私財を投じてインフラ整備や福祉活動に従事。さらに正名の死後、前田家の財産はすべて公共事業の財産とす、という彼のことば通り、二代目園主前田正次の代に阿寒国立公園が指定され（一九三四）、三代目（二代目の妻）前田光子が地元住民への土地開放などを行いさらなる発展に貢献したそうだ。現在の前田一歩園財団（一九八三年四月設立）理事長・前田三郎は「自然保護と開発についての明確なラインはないとおもう」「阿寒の美しい景観を永久に残していくのが任務」と語っている（同右）。現在もこの地の森林を管理する前田一歩園財団は、一時期の伐採過剰により本来の姿を失った天然植生の回復に成功しつつあるという（尾張敏章「北海道阿寒湖畔・前田一歩園財団の森林管理に学ぶ」『林業経済』五五（九）二〇〇九）。

阿寒川沿いのアイヌコタンついては松浦武四郎の日記にも記述があり、古くよりアイヌの住まう地であったことは間違いない。しかしいまの阿寒湖畔のアイヌコタンは観光産業目的にできたものである。明治以降の開拓により和人が入植し、炭鉱調査と採掘など、資源目当てに人口が集まり、十九世紀末年以後この地は発展をみた。前田家はこの地にアイヌの産業としての工芸（木彫り）を推奨したという。一九五四年、散在していたアイヌ家屋とみやげ物屋を一箇所にまとめるため前田一歩園が土地を無償貸与、アイヌが集落をつくるとき多くの場合そうするように、川のそばにコタン建設が始まったのだ。このように新しくつくられた先住民コミュニティやその文化については、さまざまな議論が生じる。ここでは詳細に述べないが、阿寒湖で一九二〇年代頃から観光資源として大きな注目を集めるようになったマリモをまつる「まりも祭り」（第一回は一九五〇年）もそのひとつだ（煎本孝「まりも祭りの創造―アイヌの帰属性と民族的共生―」（『民俗学研究』六六／三二〇〇一・十二）。指摘しておきたいのはあらゆる文化のどのような祭礼、どのような集落も、歴史上のあるときに形成されたものであるということ、わたしたちが伝統と信じているものの多くがその起源をたどると意外なほど新しいということ、そして変化し動いていかない文化というのは死に絶

えた過去の遺物であって生きたものではないという事実である。いいかえれば伝統とは、後世が選択して残すことにした文化のことであり、その選択・入れ替え・忘却と新生の活動が終わって伝統が固定化したときその文化はすでに死んでいるということだ。近代化以降の日本の激しい変化を考えてみれば、変化しなにかが忘れられ、なにかが新しくつけ加わったからといって、日本人が日本人でなくなったわけではなく、そう考えれば新しいものがみな「偽物」ではないということも、すぐに理解されることである。

ごく最近にできた現代アイヌ表象の一例として、阿寒湖のキャラクターデザイン、いわゆる「ゆるキャラ」の毬里夢（まりむ）がある（下図は阿寒観光協会まちづくり推進機構のホームページによる）。緑の球型ぬいぐるみに手足と目をつけ着物を着せて鉢巻を巻いたこのキャラクターの特徴は、鉢巻きと襟に描かれたアイヌ文様だ。二〇一三年に阿寒観光振興課課長岩野光男氏にうかがったところでは、この文様はアイヌと和人が何度も相談してきめたものだという。先住民族デザイン、絵画や工芸そして観光産業における知的財産の問題は、現在非常に複雑で定まらず、ゆえに興味のつきない研究領域でもある。オーストラリア先住民族に関してこの問題をどうとらえるべきか、ここ三十年ほどさまざまな方々から意見をうかがってきたのだが、阿寒湖でなされたような両者の協議と合意、つまり了解をとる、という作業こそ重要な要であり、しかしなかなかその成立はむずかしい。

毬里夢（まりむ）
（所属：NPO 法人　阿寒観光協会まちづくり推進機構）

現代先住民美術はその起源に常に、文化衝突の緊張をはらんでいる。ある民族がある土地で長年にわたり独自に育んできた文化が、西ヨーロッパ起源の近代産業社会の価値観と多くの場合（程度の差はあれ）唐突に、暴力的に衝突し、変化を余儀なくされたのちに、いままでとは異なる、しかし西ヨーロッパのものとも異なる、視覚

芸術を生む。そこに生じたものを芸術のための芸術、美学のための美学という、それ自体きわめて限定的な歴史文化的背景の上にしか成立しえない観点からのみ論じようとする限り、その価値や性質をとらえることは不可能だ。否応なしにこれは、文化横断的、領域交差的な分野であり、いままさに変化し動いている価値観に飛び乗りその流れを見定めること、いわば文化的な動体視力を要求される場所である。世界各地で狩猟採集を中心とする民の自律的・自給的な伝統経済が壊滅に追いやられた後、美術と工芸と観光産業は緩やかにつながって現代先住民族の主要産業を形成している。グローバル経済と政治の大津波に、この一見ちいさなアートの一分野はさらされつづけている。問題領域のひろがりは深く大きい。

オーストラリアの現代美術をきっかけに先住民族の現在に関心を抱き、熱帯雨林や砂漠のアボリジナル・コミュニティを訪れた。サモアやフィジー、ニュージーランドなど南太平洋の諸地域、さらにカリブ海ドミニカ島のカリブ・コミュニティなどにも足を運んで作品や創作現場を拝見し、国内外の博物館、美術館に収蔵された世界各地の先住民族の手になる創作物、そしてその展示方法を見比べてキュレーターや研究者に話を聞く、そうした活動を断続的につづけてきた。やめてはまたとりあげ、忘れてはまたおもい出し、ぽつぽつと、歩く速さで。

そのうちに確信するようになったことがある。近代ヨーロッパを主流とする近現代の知の流れ、言説の系譜は、けっして最強でも絶対でもない。そして、異なる知の流れ、異なる世界観をもち、それを語る人がゼロになることは、世界の存亡に関わる。ひとつの考えしかない世界は、ひとつの考えにより滅びる。異なる知流を学びたい。世界の別の姿を見せつづけてくれる方々の、声が聴きたい。それらについて語りたい。

最初にそういうことを考え始めるきっかけとなったのはシドニー・ニューサウスウェールズ州立美術館でのジョン・マンダインによるアボリジナル・アート展示だった。彼の仕事に衝撃を受けてから二十年以上経って、ようやく、わたしなりの考えがまとまってくると、北海道のアイヌ民族について、これ以上なにも知らないままいるわけにはいかないという気持ちがつよまった。わたしの母方の祖先は江戸時代に北海道に渡った。五代目というのは北海道入植者の子孫としては、古いほうだろう。二歳から大学に入るまで札幌で育ったわたしにとってあの島の風土こそ紛れもなく故郷、ほかにそう呼べる場所

はない。そこにはいつも、「かれら」の影が映っていた。もっとも懐かしいはずなのに、ともに育ったはずなのに、会ったということができない、友として横に立った記憶がない民の影が。

大学院生の頃、早稲田の語研でアイヌ語講座を開かれていた田村すゞ子先生の教室に、短い間だけれど通ったことがある。小学校の頃からのそれは願いだった。北海道の地名のじつに多くがアイヌ語を日本語風に発音して漢字をあてはめたものだ。カタカナのままの地名もすくなくない。自分が暮す土地につけられた名前のほんとうの意味を知らないまま、北海道和人の子どもは大きくなる。意味が知りたい、アイヌ語が習いたいとおもった。しかしその手段は周囲に容易にはみあたらなかった。本州とはまるで異なる植生の原っぱで遊びながら、それらの草木を十全に活用してきた人々の知恵を授かることなく、通り過ぎてしまう。桜について日本の古典がつぶさに歌い語るように、大姥百合（おおうばゆり）についてアイヌの古老はつぶさに歌い語ってきたのに、トゥレプというその名も、その鱗茎が澱粉の原料であり重要な食材とされてきたことも、わたしは知らずに育った。だが誰かが知っているはずだ、なにか大切なことをわたしは知らされずにいるという感覚が、ふとした瞬間に立ちあがった。名前もわからないままにかわいい草の実や花を摘み歩く道すがら、なぜこれらの草についてわたしが手にする本の数々はもっと語ってくれないのだろうと、なにか苛々とした、不穏な気持ちがわいた。札幌郊外の原生林の面影を残す原っぱの、蔓が絡む繁みをひとり漕ぎ進んで遊んでいたとき、前がふっと開けて背の高い蒲の穂が立っている湿地帯に出くわした。ふかふかした穂を触り茎の長さに見入った。蒲草の茎が最良のトマ（莫蓙）の材料であることを、二風谷で木幡サチ子さんから教えてもらったのは、それから三十五年以上が過ぎて、二〇一二年になってからのことだった（中村『dress after dress』平凡社、二〇一四）。なんとまあ迂遠な。でも、時代は確かに変わってきている。アイヌ語ラジオ講座（北海道のラジオ放送会社ＳＴＶラジオの番組）が存在する世の中になったのだから。

以来、二風谷、白老とアイヌ文化活動の拠点となっている場所をいくつか訪れ、北海道観光資源としてのオミヤゲ・アート（とくに熊の木彫り）と先住民族デザインについていくつか調べものをするうちに、阿寒湖で前田正名の名前に遭遇した。

アイヌ民族文化と前田の関係は一部地域の方々をのぞいてあまり知られていないようにおもう。しかし前田正名とその子孫の阿寒湖における活動は、瞠目に値する。かれらは北海道の自然とアイヌ民族コミュニティに観光産業の資源を見い出し、それを搾取することなく養成し地域産業として入植者と共存共栄する方針を立てて私財を投じた。しかもこれに成功したのだ。阿寒湖畔にあるチニタ民芸店の西田正男氏が「ここはある意味で先住民観光のモデルケース」とおっしゃったのは印象深かった。たしかに阿寒湖は、先住民族と入植者の協力による地域産業振興のモデルケースとして、世界的に評価されるべき特性を有している。

明治十七年、農商務省大書記だった前田が彼の部下とともに、驚異的な速度とボリュームでとりまとめた全三十巻の「興業意見」は、当時大蔵大臣だった松方正義の財政方針の根本を徹底的に批判したものであったため、まともにとりあげられないままに終わり、派閥闘争の影響もあって前田は官職を退く羽目になった。しかし、地方の地場産業をつぶすのではなくむしろ育成して諸外国に対抗できる経済力を、という彼の意見には賛同する人も多かった。福澤の揶揄にあってもその全国行脚の活動が止むことはなく、ヨーロッパへの視察旅行も繰り返し精力的に行っている。阿寒湖での前田一歩園の事業はそうした活動の一環であった。福澤諭吉・松方正義型の産業モデルに反対したことで当時彼は傍流、保守反動、頑固な国家主義者と呼ばれたが、輸入技術を官主導で大規模に展開する産業開発は在来産業をつぶす、という彼の主張は、現在むしろ常識的に響くようにおもう。そんな前田の意見をおしまいにいくつか拾い読みしておこう。

「熟々思ふに我国の土地人口は、敢てヨーロッパの強国に遜らざるなり。而して維新前より幾千万金を費して開明国の制度、文物の輸入を務むるも、海外諸強国と対等の地位に立つことを得ざるものは何ぞや。海関税権の恢復せざるに因るか、将た治外法権の撤去せざるに由るか、抑も又法律の完備せざるが為めか。余の見る所を以てすれば是れ対等の実力を有せざるが為めなり。故に日本の日本たるべき目的を達するは、我が農工商をして強国の農工商の地位に進ましむるに在り。之を為す如何、先づ我が農工商の地位を詳細に知了し、次に其将来の進歩を図るを要す。」（「興業意見要旨」前田正名『興業意見・所見他』明治大正農政経済名著集①　農村漁村文化協会、一九七六、以下同　三九〇頁）

たしかに文章は福澤に比べるとかたくるしい感じがするが、地場産業（農工商）の現状を知り、これを発展させることにより先進国になる、士に先んじて農工商、輸入技術に先んじて地元に問うべし、その意見は現在むしろ多くの人の共感を得るのではないだろうか。

「今夫れ衣や食や住は、之を人間生活の必要点たる、狭義に解すれば餒へず凍へず雨露に暴されざるに止らん。故に甘旨も食なり粗糲も食なり、綾羅も衣なり、襤褸も衣なり、石館瓦屋も住なり、茅舎草屋も住なり。上古の嘗て果実を食ひ樹皮を衣て穴居す、是れ亦衣食住なり。今此に果食、樹衣、穴居の人あらん、吾人と共に立て同等の交際を為さんと欲す。吾人能く肯ぜんか。其肯ぜざるは、彼今日所謂人間普通の生活を為さゞればなり。今吾人は果食、樹衣、穴居の人に非ず。然れども吾人に比して幾層進みたる生活を為すの国あり。此等の国民が吾人を見るの感果たして如何、是れ思はざるべからず。吾人の生活は未だ世間並のものと云ひ難し。然るを容易に企及すべからざる対等を論じ、或は政治思想の厚薄を比較し、政事に奔走し人の生業を妨げ、若くは僥倖心を起さしむるが如きは、将来を慮らざるの所為と謂はざるを得ず。」（「生活　総論」三六一頁）

これをみるに前田はあくまで進歩史観の保持者で、物質文明の進展具合で民族に上下を認めてはいるが、どんな民も「生業」を大事にする権利がありこれが他に先んじて重視されるべき、他を見下げる前に自分の不足を反省すべき、大きくいえば生活が成り立てばよい、民の生活向上には生業の安定と地道で土地に合った産業の発展が必須、そういう意見とわかる。

「然るに世人動もすれば我国の産業を論ずるに当たり区々学理の末に馳せて、其国柄の如何を顧みず、曰く保護、曰く放任、議論百出其甚きは産業の発達を理論の規矩に準拠せしめんとするものあるに至る。嗚呼何ぞ誤まれるの甚きや。学理には国の境域なく、産業には特殊の国柄あるを知らざるべからず。況やまた我国今日の産業を説くに当ては、他の発達せるヨーロッパ諸国の現在を以て律すべからざるものあるをや。」（「産業　総論」三七四頁）

ヨーロッパの理論で日本のローカル産業の方向を決めることには反対、それぞれの国情に合った産業の実態がある。脱亜入欧のスローガンを掲げる側には古くさく見えたかもしれず、時代風潮が国粋的全体主義に傾いていったときにはかれらにくみするように響いたかもしれな

いが、生態系や気候風土に即した産業をという主張は、精神主義という福澤の批判に相反し現実的で常識的だ。

「山林・原野は国家の富源なり、而して其現状の上に述ぶるが如し。富源の開墾を計らずして浸に文明の機器を購買す。其買ふや買ふの力ありて買ふにあらず、必ずや祖先に負債するにあらざれば他人に負債せるなり。請ふ其本末を知れ、請ふ其順序を知れ。」（「国土　山林・原野」三七一―二頁）

最新テクノロジーの輸入さえすれば産業発達というのは間違い、豊かな自然資源を無駄にせず大切にしてきた山林愛養の慣習を取り戻し、自然を保全しながら活用すべし。これもエコロジーへの配慮が必要という共通認識が育ちつつある現在、むしろ当然のことに聞こえる。

現在、旧阿寒町は釧路市の一部になり、市によって「アイヌシアターイコロ」が新たに建てられ、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されたアイヌ古式舞踏が観光客向けに披露されている。ただ、そうした場所に実際足を運んでみると、一部の観光客からはアイヌ民族に関する知識の不足や誤解を示す発言も聞こえてくる。現在の日本において先住民族に関する意識に大きなばらつきがあることを痛感せざるをえない。伝統文化を紹介する試みが、偏った考えや誤った情報にしか接してこなかった人々には、誤解を与えてしまうこともある。

理解不足の甚だしい一例が、金子快之札幌市議会議員の、「アイヌ民族なんて、いまはもういないんですよね」というTwitter発言（二〇一四年八月）である。数多くの批判が寄せられても金子氏は自説を曲げず、後づけの恣意的な文献引用を繰り返し、インターネット世界で「ネトウヨ的「支持者」を獲得」しつづけている（岡和田晃、マーク・ウィンチェスター編『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、二〇一五、一五頁）。

同時代に生きているからといって知識や理解が一様であるはずもないのは、どんな地域のどんな時代の人間社会においてもやむをえない事実である。しかしだからこそ福澤が切り捨てた前田正名の活動を、阿寒湖という場所から見直し、先住民族と入植者の協力で持続可能なローカル・エコロジカル産業を育てようという先人の試みが日本にあったことを思い出すことは大切だろう。阿寒湖と前田正名とアイヌはつながっている、アイヌ文様のように途切れなく。

（本論考はJSPS科研費25244011の助成を受けた研究調査の成果を反映しています。）